



TITLE:

日本という言語空間における無意識のディスクール(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

岡安, 裕介

CITATION:

岡安, 裕介. 日本という言語空間における無意識のディスクール. 京都大学, 2016, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19802>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要旨は2016-05-01に公開

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	岡安 裕介
論文題目	日本という言語空間における無意識のディスクール		
(論文内容の要旨)			
<p>本博士学位申請論文は、日本文化をひとつの言語空間として捉え、その構造の特徴と変遷を、柳田国男、折口信夫、そしてレヴィ=ストロースの所見を活用して捉えようとしたものである。</p> <p>序章においては、文化の中の言語活動の象徴的機能を解明するレヴィ=ストロースの構造人類学の方法論を本論文でも用いること、その際にレヴィ=ストロースも言及する無意識的構造に到達することを目指すことが述べられる。また、本論文が対象とするのは日本文化であるが、この対象に関しても同じ方法を用いるにあたり、日本文化論に関わる先行研究と、レヴィ=ストロースの方法をより明確に無意識の構造につなぐためのジャック・ラカンの方法論とが紹介され、それらの研究を検討して、日本文化の場合には、すでに柳田国男と折口信夫とが、やはり言語活動による伝承の様式に着目して研究を進めていたことを重視し、彼らの研究をこの論文の出発点に据えると述べられる。そして現代の言語空間に彼らの研究成果を導入して論じるために、先ほど紹介されたジャック・ラカンによる無意識の構造化の方法が用いられると述べられる。</p> <p>第一章「精神分析と日本民俗学との思想的交錯」では、序章で述べられたプログラムに沿って、まず柳田国男の民俗学が検討される。上記のように、無意識の構造を照らし出すことが問題になるが、日本民俗学においてそのような方法論的意識が存在したのかどうかを検討するため、柳田の作品を検討して、そこにフロイトへの言及があるばかりでなく、彼の重要概念のひとつである「心意現象」という概念は、「無意識」という概念との関連において構成されているということを見出している。こうして申請者は、フロイトからレヴィ=ストロースへそしてラカンへと受け継がれた精神分析一民族学的な流れと、フロイトから柳田へそして折口へという流れがあるという形で洋の東西の思想史を構想して論を進める。</p> <p>第二章「柳田国男から折口信夫へ受け継がれしもの」では、前章で述べられたような、言語活動という条件のもとでこそ、民俗の伝承ということが考察可能になるという洞察が、柳田から折口信夫へと継承されたものであると捉え、この二人の学者の間の継承関係を具体的に跡付けている。とりわけ折口の側からは、柳田の研究方法の根底には「言語への愛」があるとされ、祖先が現在の生者たちに残したものは「きびしく言へば、言語しかない」という立場が表明されており、日本民俗学の方法論として、言語活動に着目することが本質的な重要性を帯びているということが明らかにされている。したがって、この二人の間で継承されたものを基にして日本の民俗学を遂行する場合には、時間の流れの中で形を変えてゆきつつある言語空間の構造を捉えることに焦点を当てなければならない。申請者はこの観点から、折口の民俗学は、言語構造の中で、ことばが伝えられてゆく方向性を探り、それによって「古代論理」を明らかにするものであったと、その意義を述べている。</p> <p>第三章「折口信夫の言語伝承考」では、折口の明らかにした言語活動に基づく古代の論理が、共同体の構成の論理として展開されていたということを論じている。ここでは言葉の伝達の様式として、国の形や共同体の相互関係のあり方が規定されるという見方が提出されている。折口の言葉を踏まえて、申請者は「言語伝承の図式」として、通時</p>			

的に世代から世代へと言葉が伝えられる運動を構想する。

第四章「日本という言語空間における無意識のディスクール」では、このような伝承の運動が、精神分析における伝承形態と同型性をもっているということを論証している。すなわち、いわゆるエディプスコンプレクスは、感情的な様式であると一般には理解されているが、ラカンに拠ればそれは実は世代間で言葉を伝える様式であり、その考えに立つならば、折口が提示する日本の言語伝承の図式は、エディプスコンプレクスのあり方に対応することができる。しかも日本の場合、エディプスコンプレクスの中でもやや非定型的であるとされる形のものが機能しているという推定も成り立つと申請者は論じている。日の神の系譜と呼ぶべきものが、その形を取っており、それは、翻訳者として中に立つ存在者のありようが構造を決める系譜であるから、そのような翻訳の体系として、日本の言語伝達の図式、ひいては文化の構造が決定されているのが日本の言語空間であると申請者は論じている。

(論文審査の結果の要旨)

レヴィ=ストロースの『構造人類学』が日本語に訳されて久しく、またジャック・ラカンの主著『エクリ』も同様であるが、その両者の間で極めて豊かな思想的影響関係があったということは、日本では論じられることが少ない。構造主義というレッテルはしばしば両者に対して用いられるのであるが、その中身がどのようなものであったのかということは詳しく調べられないままになりがちである。いきおい、民族学、ないし民俗学と、精神分析との間に存在した強い相互交流についても、等閑に付されるきらいがある。

本論文は、このように忘れられがちであった思想的潮流にもう一度光をあて、その潮流から汲み取られることがらを、日本文化の構造を解明するのに用いようとした論文である。

序章において、上記の学的状況による制約のために民俗学において見逃されてきたのではないかと思われる着眼点を取り出した後、申請者は、第一章において、柳田国男における精神分析への意外な近接性を明らかにしている。その際、柳田自身の作品を精査することによって、フロイトへの言及の実情や無意識という用語の使用を確認しただけでなく、当時のどのような学問状況において、そのような交流が可能になったかを、当時の学術誌を調べることによって再構成している。それによる印象的な成果として、すでにフロイトの精神分析とその周辺で人類学的な精神分析研究が進んでいたことを受けて、柳田の周辺でも、そうしたヨーロッパの潮流に目を開かれていた人々がいて、フロイトの方法について語り、それを実践していたということが明らかになった。また、そのような学問的業績は、今ではあまり言及されなくなっているものが多い。しかし柳田は、そこからの影響を受けていたと推定され、その影響は、柳田の学問の中に行き渡っている「言語への愛」によって特徴づけられる。

しかしこの「言語への愛」ということは、柳田自身によって語られたのではなく、もうひとりのすぐれた民俗学者である折口信夫によって語られたのである。すなわち折口は、柳田の民俗学の方法がそうした言語への着目を基礎にしていることに気づき、自らその方法をさらに深めていったのであった。そのことによって折口は文学に傾斜したと思われたこともあったが、実はそれは文学に残された人々の生活の痕跡を探るための民俗学的方法論なのであった。そして折口は柳田の「心意現象」と言われるものを、言語による伝承であると捉え返し、言語論的な民俗学とでも言うべきものを構築していったのである。こうして日本の民俗学は、言語の作用に着目した構造論的な民俗学となっていたのである。その際に「無意識伝承」という考え方もあったことから、この民俗学が、精神分析における言語論的な潮流、すなわちラカンの精神分析に、期せずして近づいていたことが見てとれるのである。この指摘は、初めに述べたこれまでの民俗学と精神分析の間の交流への無関心という一般の潮流から見ても、検証してみる価値のあるものである。

申請者はこのような流れを明確化し、この指摘を、先行する幾つかの研究と照らし合わせたうえで、大きく前面に押し出して、精神分析の構造論と対応させてみようとする。そのためには、この言語伝承のための無意識の構造が、国の形に関与し、また共同体間の相互関係を律しているということを論ずる。とりわけ、折口を踏まえ、「みこと」を伝えるために中に立つ存在が、一種の翻訳のような営為を行って、その行為によって、伝達の及ぶ国の範囲の形や、つながりを持てる共同体どうしの交流が決定されてゆくとする。この見方は、民俗の儀式などで取り交わされる言葉の動きに鑑みれば、傾聴に値するものであると言えよう。

また、もう一つの指摘である通時的な言語伝承については、エディプスコンプレックスが通世代的伝承の形式であるというラカンの思考を踏まえ、折口の論との比較に当たりそれを理論的に生かしていると言える。

このように本論文は、大切ではあったが従来は着目されにくかった学問的な流れに光を当ててそこからの帰結を導き出しており、実証的な学問、とりわけ歴史学や実地の民俗学との照合という課題を残しているとはいえ、言語空間の構造という着眼点にしたがって、所期の成果を提示していると言える。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年2月4日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：平成28年4月1日以降